

東日本大震災を語りをりたつた一人の遺体も見ずに

伊藤一彦

「復旧や復興について論じをりたつた一人の遺体にも触れで」という一首もあった。非当事者が震災を語る後ろめたさと胡散臭さ。当事者と非当事者の埋められない溝。震災後、言葉が軽くなってしまった現状と誠実に向き合おうとする作と読んだ。

行きずりに気易く肩を叩くようにがんばれと言ひがんばろうと言う

片山紫

これも伊藤作品と同じく、震災後に言葉が軽くなつた状況に取材。そんな状況への批判を前面に出している。

下句、「がんばる」という具体的な語彙を出したことで、一首に説得力が生まれた。

四庭^{キロ}をふとりたるのち四庭^{キロ}を瘦せたる我を我のみぞ知る
山本陽子

東京歌会で評判になつた作。ダイエットをユーモラスにうたつたアイディアが人気をえた。そこで出た久松洋一の読みに感心した。「家族や職場のだれもが、減量にもリバウンドにも気付いてくれなかつた、そんな孤独感を読むべきではないか」というのだ。全く賛成。いい読者とめぐりあつた一首。

追い越してツバメ去りたり中空に速度が描く涼やかな線

「中空に速度が描く……線」が、うまい。ただ、「涼やか」がベストだつたかどうか、多少疑問が残るが。

鯉のぼりと呼ばれているが生涯のほとんどは鯉の箱詰めなのだ

武藤義哉

これも「東京歌会」に出された作で、そこでこの歌のユーモアの質について、さまざまな意見が出た。ユーモアの切れはなかなかだと思う。ただ、「……呼ばれているが……なのだ」という口語文体の単調さはいかんともしがたい。

大樹伐り悔いの滲める曇天に雁しわがれた一声発す

藤原葉子

薪用に大きな樹を伐採した作が他にある。カナダは日本どちがつて、大樹といえばとてつもない大樹なのだろう。倒されたあとに現れた空を歌つて印象的な一首となつた。「しわがれた一声」も、いい。

うたたねを二、三はこべる終バスは久留里^{くろり}・富樂里^{ふらく}とぬけてふるさと
クリシユナ智子

「久留里」「富樂里」という独特的な発音の二つの地名を並べた面白さ。ネットで見ると、館山自動車道を通つて房總へゆくバスの停留所や、道の駅に、この二つの名前が出て来る。何やら、童話の世界に入り込んでゆくような雰囲気。

付箋紙を一枚一枚剥ぐやうに話しあじめる地震、原

短歌の現在

No.374 今月の15首を読む
佐佐木幸綱